

このまちで始まった近代工業への歩み。日本初の洋式ガラス工場誕生。

私達のまち「大崎」の歴史の中に埋もれた興味深い事柄や、ゆかりのストーリーを訪ねる「大崎今昔物語」。過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNAの一端が、少しでも明らかになればと願い、一話完結のシリーズとして取り上げていきます。その第四話は、

大崎(北品川)に日本初の西洋式ガラス製造工場が誕生した話。このまちは、日本の近代工業発祥の地とも言えそうです。

明治21年、「品川硝子会社」で製造された、日本で初めての大産生産によるビール瓶



明治6年、東海寺境内に創設された日本初の近代ガラス工場「興業社」。それは、後に品川、大崎地区でのものづくり産業発展の種子となって現代へ伝播していったのです。



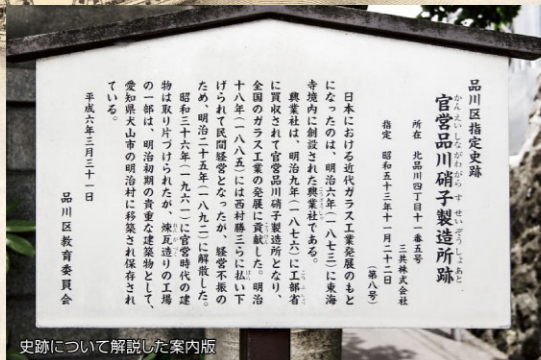
うっすらと「硝子製造場」の表記(天地逆)のある当時の周辺地図。海が近く、目黒川のほぼ河口にあったことが分かります。「明治十二年東京全図」より(資料提供:古地図資料出版)



官営品川硝子製造所跡の史跡



愛知県・犬山市の博物館明治村に移築された品川硝子製造所の建物



史跡について解説した案内版

「興業社」が官営化され、明治9年に「品川硝子製造所」として建てられたレンガ造平家建ての建物部分は、昭和44年に愛知県・犬山市の「博物館明治村」に移築され、登録有形文化財として保存展示されています。

博物館明治村とは 芸術上、歴史上、ともに高い価値のある明治時代を中心とした建造物を保存・公開する博物館。愛知県犬山市にある100万㎡もの敷地では、全国と海外から移築・補修した重要文化財10件を含めた全60件以上の貴重な建造物群を、「体験イベント」などを通じて身近に見学することができます。

「品川白煉瓦製造所」(※これも西村勝三が創設)や「日本光学」の例の他にも、「品川硝子製造所」や「(有)品川硝子会社」との関係の中で生まれた製造業は多数に及んでいます。明治末期に「(有)品川硝子会社」の敷地を引き継いだ「三共合資会社」(後の「三共製薬」)※有名な高峰譲吉や鈴木梅太郎の手により薬品もここで製造される)やガラス製造技術が生命線ともなる白熱灯の製造を行った東京電気(後の東芝)。さらに、「興業社」が建ち、その後発展した硝子工場周りの目黒川畔には、「日本ペイント」を始めとする多くの製造工場が誕生しています。こうしたことから、目黒川畔に位置する大崎は、「興業社」の創設とともに京浜工業地帯北側の発展の核としての役割を担っていったのです。



かつて「興業社」が生まれ、その後「品川硝子製造所」が設立されたその場所は、現在は「第一三共物流センター」とその奥、東海寺・大山墓地の敷地となっています。目黒川に面して広がっていた工場が、ガラスの原料を運びやすい川の水利を利用していたことが伺えます。



大山墓地の奥にある史跡

近代ガラス産業の種子を全国に拡散。併せて、多くの基幹企業発展の礎にも。ここ大崎では花開くことのなかった板ガラス製造産業の芽も、やがて全国の地で大輪の花を咲かすこととなります。官営の「品川硝子製造所」から民間に払い下げられた際、多くの技能者が全国各地に散ることによって日本に本格的な近代ガラス産業を根付かせたからです。しかも、この地で育まれたものづくりのDNAは近代工業の先駆けとなる多くの基幹企業を醸成させていきます。ガラス製造用の窯に必要な耐火煉瓦が「品川白煉瓦製造所」を、また、「品川硝子製造所」の技術者が「日本光学」を生み出したのもその例。その他多くの有名製造業がガラス製造とのつながりの中で誕生し、それはやがて大崎品川に京浜工業地帯の形成を助成していきます。明治6年、「興業社」が大崎の地を得て築いた日本工業発展への礎は、いま、私達のまちの発展にもつながる土台となって生き続けています。



品川硝子製造所内(上)で培った職士のガラス作りの技術はアート作品にも。写真は大重伸左衛門の作とされる「金赤色桜文硝子花瓶」(品川区指定文化財)の道はここに閉ざされることとなります。明治期に殖産興業の建築材料として求められた西洋式板ガラス製造の事業化は容易ではなく、国産化が実現したのは明治42年になってからのことでした。

目黒川の水利を利用した板ガラス製造工場建設。その後、興業の歴史を繰り返しながらも発展の途へ。沢庵和尚ゆかりの地として名高い北品川・東海寺の境内に、我が国初の西洋式ガラス製造工場があり、この場所から日本各地のガラス製造業はもとより、近代工業の礎となる各種製造業の発展が始まった、という話は「こぼれ話」が。明治6年、東海寺境内の目黒川畔に、当時は海に近い河口としての地の利のもとに創設された「興業社」がそれで、後に明治政府の買上げにより官営の「品川硝子製造所」として国産板ガラスの製造に着手しています。その後、板ガラスの本格製造化には至らず、明治18年には民間に払い下げられ、「品川硝子会社」として近代製革・製靴業の先駆者、西村勝三らの経営に委ねられます。ここでは、板ガラスのほかビール瓶や「青真」などの生産を目指すものの、やがて板ガラス製造の失敗などにより経営不振となり、明治25年には解散。洋式ガラス工業への道はここに閉ざされることとなります。明治期に殖産興業の建築材料として求められた西洋式板ガラス製造の事業化は容易ではなく、国産化が実現したのは明治42年になってからのことでした。